

□ ピアノ

真 嶋 雄 大

2020年はベートーヴェンが生まれて250年に当たるため、新たに令和の時代となった2019年は、それを意識したコンサートやイベントが、既にちらほらと顔を見せ始めた。河村尚子は「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ・プロジェクト」を継続していたが、11月にはベートーヴェン最後のソナタ3曲で完結。5月の第21回別府アルゲリッチ音楽祭ではテーマを「悠久の真実～ベートーヴェン」とし、アルゲリッチはリスト「ピアノ協奏曲第1番」などを演奏、同音楽祭の東京公演ではアルゲリッチが小澤征爾指揮水戸室内管とベートーヴェン「ピアノ協奏曲第2番」で共演。小山実恵恵は、6月から「ベートーヴェン、そして…」というシリーズを開始、11月にはソナタ《ハンマークラヴィーア》を濃密に再現した。渡邊康雄は3月、オーケストラ・アンサンブル金沢を弾き振りにベートーヴェン「ピアノ協奏曲第1番」と「第5番《皇帝》」を演奏、またイリーナ・メジューエワは名古屋を舞台にベートーヴェン「ソナタ全曲演奏」をスタートさせた。来日ピアニストでも、イゴール・レヴィットがリサイタルではJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」を、CDでベートーヴェン「ソナタ全曲集」をリリース、アンデルシェフスキは得意の「ディアベリ変奏曲」を、ルドルフ・ブーブingerは、オール・ベートーヴェンでのリサイタルで喝采を浴びた。

ベートーヴェン以外にもピアノ界は活況を呈した。「東京・春・音楽祭」では、コンスタンチン・リフシッツが、J.S.バッハのピアノ協奏曲全曲弾き振りし、さらに「バルティータ」、「フランス組曲」、「イギリス組曲」を集中的に演奏して圧倒的な支持を得、またリフシッツは石川県立音楽堂において、能とのコラボレーション「コラージュ～能による3つの情景～」で聴衆を湧かせた。

今年10周年を迎えた「ショパン・フェスティバル」は、日本・ポーランド国交樹立100年記念をテーマに開催され、田崎悦子など11人のピアニストがその華を競った。また、生誕後200年にわたるショパン像を紹介する「ショパン 200年の肖像」展が10月から兵庫、東京などで開かれ、日本初公開の自筆譜や書簡など貴重な資料が展示されて話題を呼んだ。

12月には小倉貴久子が2012年から始め、全40回にも及んだ「モーツァルトのクラヴィーアのある部屋」シリーズを完結させ、小倉が参加したシンポジウム「歴史的ピアノと音楽文化」が一橋大学で開催された。小菅優は四大元素によるリサイタル・シリーズ「Four Elements」の第3回で気を吐いた。田部京子はシュベルトやシューマンに相変わらず安定した力量を示し、渡邊暁雄生誕100周年記念演奏会が6月に行われ、長男康雄、次男規久男、その夫人寺田悦子が、ガーシュウィン「ピアノ協奏曲」を楽章ごとに弾き別けて聴衆を熱狂させた。また館野泉は、5月のコンサートで、長男ヤンネがコンサートマスターを務めるラ・テンペスタというオーケストラと共演したが、招聘した資金はクラウド・ファンディングで集めたもの。

来日ピアニストでも、87歳になるホアキン・アチュカロがショパン「24の前奏曲」等を鮮やかに示し、クリスティアン・ツィメルマンは、2月にブラームスのソナタなどで独自の見解を示した。またビエール・ロラン＝エマールは2月に現代曲とJ.S.バッハ「ゴルトベルク変奏曲」というマリアージュで高い

評価を得た、ロナウド・ブラウティハムも5月にハイドンとベートーヴェンを対比させた濃密な演奏を聴かせた。そして映画にも多数の楽曲を提供している現代音楽の重要作曲家でピアニストのマックス・リヒターが3月に来日、ピアノと弦楽アンサンブルによるショーケースをステージに乗せた。

デビュー30年を迎える三船優子は「リスト巡礼」リサイタルを取行し、清水和音は4月に東京フィルとショパン第1番、ラヴェル、ガーシュウィン「ラプソディー・イン・ブルー」を一夜で共演、またワシントンDCでのナショナル・チェリー・ブロッサム音楽祭のフィナーレを飾ったのは、野平一郎であった。野平はJ.S.バッハ「バルティータ全曲演奏会」を9月に演奏したが、これはJ.S.バッハを全曲演奏する10年をかけた壮大なプロジェクトの一環。また連続演奏でギネス記録も持っている横山幸雄は5月、3日間にわたって、協奏曲、室内楽、歌曲、独奏曲など「ショパン全作品演奏会」に挑んだ。

さてコンクールの結果はいつも悲喜こもごもであるが、ロン＝ティボー国際コンクール・ピアノ部門では、三浦謙司が優勝、務川慧悟が第2位という、日本人ワッサー・フィニッシュで大いに盛り上がり、第16回チャイコフスキー国際コンクール・ピアノ部門では、クララ・ハスキル覇者の藤田真央が第2位入賞、また第11回パデレフスキコンクールでは、古海行子が第3位に入賞、一方で第7回仙台国際コンクール・ピアノ部門は韓国のチェ・ホンロクが優勝して幕をとじた。

トビックスとしては、反田恭平が新レーベル「NOVA Record」を設立、第29回出光音楽賞には牛田智大が選ばれ、2018年秋から19年1月にかけ、何人かのピアニストが手分けをしてスカルラッティの555曲のチェンバロ・ソナタ全曲演奏会が完遂されたのも巷間の話題を呼んだ。

計報も幾つか寄せられ、アンドレ・ブレヴィンが2月28日（90歳）、イェルク・デームスが4月16日（90歳）、宮沢明子が4月23日（78歳）、杉谷昭子が5月8日（76歳）、そしてパウル・バドゥラ＝スコダが9月25日（91歳）、それぞれ鬼籍に入った。

各楽器メーカーも独自の個性を有した楽器を次々に発表しており、まずヤマハでは、グランドピアノアクションを搭載したハイブリッドピアノに、新たにベーゼンドルファー インペリアル音源をサンプリングしたアバングランド「NIX」を2月に、音とタッチにこだわった電子ピアノ「アリュス」より3機種を4月に、そして本格的なピアノの音とタッチに、多彩な音色と機能を加えた「CVP800シリーズ」を12月に発売。カワイ楽器は、創立90周年記念モデルとして2017年に発売した「NOVUS NV10」に続く、コンパクトなボディにアップライトピアノのアクションを搭載した「NOVUS NV5」を10月に発表、アコースティックピアノの響きを再現している。

孔雀の絵画などから着想を得て自由なイメージで設計されたベーゼンドルファー「グランドボヘミアン」は世界でわずか9台しか製造されないが、ベーゼンドルファー・ジャパンは日は壊友好150周年を記念した「ウィーン・プロダクト展」にオーストリア大統領も参加して限定モデル「Woman in Gold」を展示した。またスタインウェイ・ジャパンは、すでに日本でも発売開始となった自動演奏ピアノSPIRIOの次世代のモデルSPIRIO/rの世界限定モデル「BLACK DIAMOND」を11月に発表、その8台限定のD-274のうち1台が世界巡回され、ランランの日本公演のためにその時期「来日」していたもの。2020年には日本リリースされる。

そしてベビシユタイン・ジャパンは、コンパクトグランド「L167」を好んで使用するエル＝バシヤリフシツ、カツァリス、ダルベルト、福岡洗太郎など7名のピアニストのサイン入りエンブレムを内側に張った限定10台のピアノをセレクトしたと発表した。

2020年はベートーヴェン・イヤー、大いに期待するでしょう。